

文化財の盗難被害と防御システムの実態に関する研究

A Study on the Theft of Cultural Properties and Security System

金 玖淑¹・谷口 仁士²

Minsuk Kim and Hitoshi Taniguchi

¹ 日本ミクニヤ株式会社社員 本社サテライト (〒556-0021 大阪市浪速区幸町3-1-10)

Staff, Mikuniya Coporation, Satellite Office

² 元立命館大学教授 立命館グローバル・イノベーション研究機構

Ex-Professor, Ritsumeikan Global Innovation Research Organization, Ritsumeikan University

The purpose of this study is to clarify the actual state of theft of cultural properties and the security system by carrying out the questionnaire survey and the hearing survey for the owner of the Japanese Buddhist temple and Shinto shrine and field survey. The results are as follows: (1) Buddha statues and pictures are higher theft than ancient documents; (2) The stealing or arson occurs before and after the temple or shrine's opening hours than midnight.; (3) Criminals tends to use the route of the mountain or from the front ; (4) It is the most desirable for the defense system for cultural properties to set up appropriate amount on the appropriate place.

Keywords : *human-made disaster, cultural properties, artifacts, theft, stealing, arson, graffiti*

1. 序

(1) 研究背景及び目的

近年における文化財建造物の放火や美術工芸品の盗難被害の増加に伴い、文化庁では「国宝・重要文化財（美術工芸品）の防災、防火及び防犯対策の徹底等について」の通知（平成25年8月19日 25財美学第120号）¹⁾を出し、文化財の防火防犯対策を促している。この通知の内容をみると、地元消防・警察などの関係機関との連携を図ることや必要に応じて地域住民などの協力を得ること、防災設備の設置の推進及び定期的な点検を行うこと、文化財を展示等により公開する場合の管理体制の見直しをすること、文化財を安全に公開できる対策が不十分な場合には防災・防火及び防犯対策が十分施された施設に文化財を一時保管するなどの措置を考慮すること、文化庁作成の防災・防火及び防犯対策に関するリーフレット（「美術工芸品の防火・防犯対策チェックリスト」²⁾）等を活用することなどを勧めている。

しかし、2012年度に立命館大学歴史都市防災研究センターが寺社の文化財所有者を対象に実施したアンケート調査の結果によると³⁾、回答者の34.4%が人為的災害を経験しており、その災害の種類においては放火、落書き、破損、盗難の順に回答率が高くなる傾向を示した。また、防犯体制としては巡回などの自主的な活動と警報設備が主な対策となっており、防犯設備の導入は全回答者の56.2%に留まっていることが判明した。この分析結果は、人為的災害から文化財を防御するためには盗難対策が最も優先されるべきであるにも関わらず、防犯設備の設置は未だ充分に進んでいないことを示す。

そこで、本研究では文化財の盗難被害に注目し、文化財所有者及び管理者へのアンケート調査、ヒアリング調査と実地調査を通じて、盗難文化財（美術工芸品）の特徴や種類、文化財が遭遇した人為的災害の被害箇所の特徴、被害当時の防御システムの状況、被害から得た教訓と防御システムの改善状況などについて分析・考察することで文化財が直面している保護管理の実態を明らかにすることをその目的とする。

(2) 研究方法と研究内容

まず、2012年度に実施した全国を対象としたアンケート調査で人為的災害の経験度（被害の遭遇頻度）が最も高かった盗難被害を中心として人為的災害の地域特性や具体的な被害内容と防御システムの設置状況について本稿の2章で分析・考察する。

ついで、2012年度のアンケート調査に協力頂いた寺社のうち盗難被害に遭ったことがあると回答した箇所と、日本の文化財の盗難事件が孕む問題をリアルに描いた菅野朋子の『韓国窃盗ビジネスを追え-狙われる日本の「国宝」』⁴⁾に紹介された事例の中から防御システムがあったにも関わらず盗難被害に遭った箇所、及び最近の盗難事例などから約20ヶ所を選別し、調査を開始した。本稿の3章では、そのうち2013年度に調査できた愛知県（1ヶ所）・兵庫県（1ヶ所）・滋賀県（1ヶ所）・奈良県（3ヶ所）・長崎県（3ヶ所）の計9ヶ所の被害事例における盗難などの被害発生に至った経緯や被害後の管理者の対応・体制などを分析し、今後の防犯システムの構築に向けた考察を行う。

最後の4章では、本稿の第2章と第3章から得た分析結果をまとめるとともに、文化財を盗難被害から守るために必要となる防御システムの改善点などについて述べる。

2. 文化財所有者のアンケート回答からみる文化財の盗難被害と防御システムの実態

(1) 人為的災害の経験度と防犯設備

2012年度に実施したアンケート調査で「盗難に遭ったことがある」と回答したのは45ヶ所である。図1の棒グラフは45ヶ所の被害箇所における盗難をはじめとした人為的災害の種類を具体的に示したものである。これによると、盗難のみを経験したのは24ヶ所（53.3%）で、2種類の災害経験箇所は14ヶ所（31.1%）で、3種類以上の災害経験箇所は7ヶ所（15.6%）となっている。この結果は、盗難被害を経験した箇所は他の被害（落書きや破損など）の経験度も高いことを意味する。また、地域的には京都府や奈良県の文化財が複数の人為的災害への経験度が高いことがわかる。

また、盗難などの人為的災害に遭った箇所における防犯設備（カメラや赤外線センサーなど）の設置状況を示したのが図1の点線グラフである。45ヶ所のうち、約1/4の11ヶ所（24.4%）に防犯設備が設置されていない状況である。

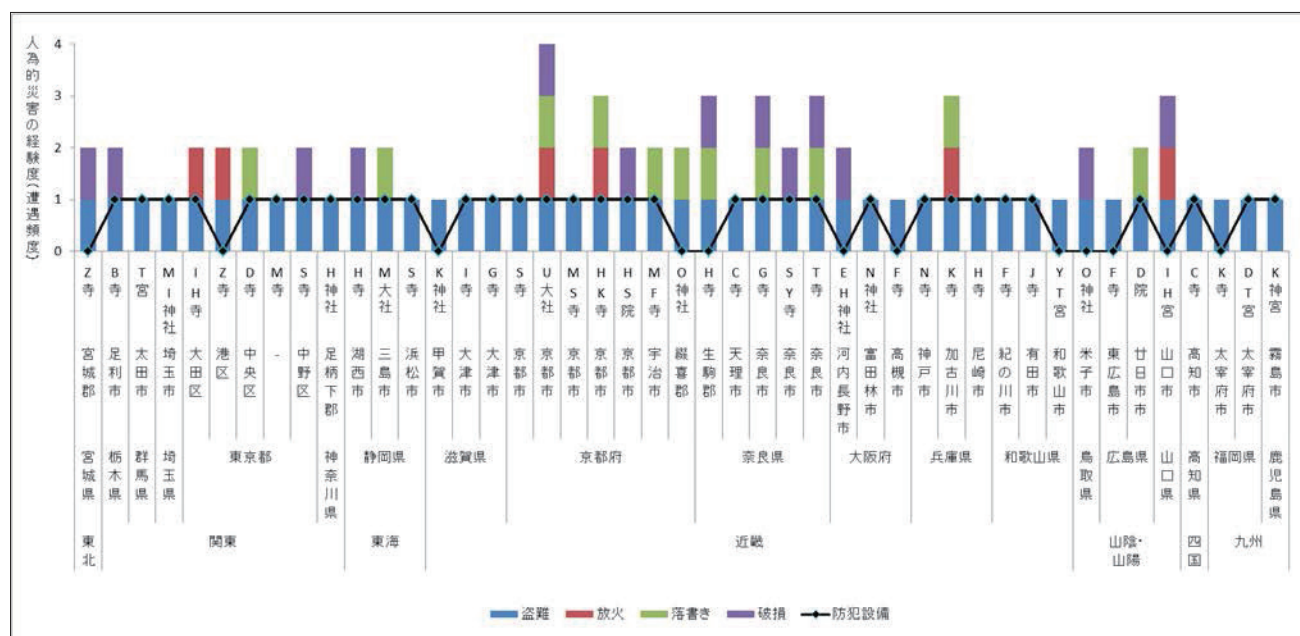


図1 文化財における人為的災害の種類及び経験度と防犯設備設置状況（2012年度実施のアンケート回答から作成）

2) 盗難などの被害対象及び被害場所

図2は盗難を主とした人為的災害の被害箇所（45ヶ所）における被害対象及び被害場所を示したものであ

る。22ヶ所が本堂で被害を経験したと回答し、絵画類や古文書に比べ仏像の被害経験度が遥かに高いことがわかる。図3のモノクロ棒グラフは文化財所有者の回答をもとに、被害箇所ごとの盗難被害に遭ったモノを整理したものである。1種類の文化財が盗まれた箇所（27ヶ所）もあれば、2種類以上の文化財が盗まれた箇所（8ヶ所）もある。後者の内訳をみると、「仏像及び絵画類」の被害が4ヶ所で最も多く、「絵画類及び古文書」の被害が4ヶ所である。また、「絵画類及び古文書」と「仏像及びその他」がそれぞれ1ヶ所である。

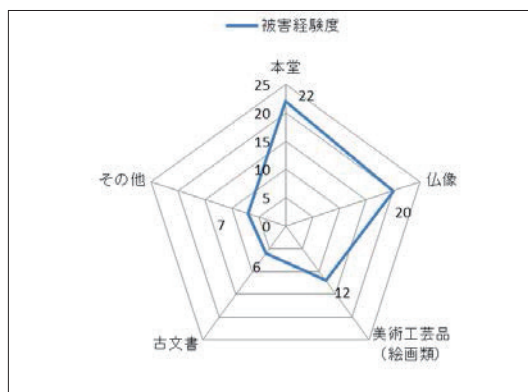


図2 盗難などの被害対象及び被害場所
(2012年度実施のアンケート回答から作成)

表1 盗難などの被害箇所の防犯対策の現状
(2012年度実施のアンケート回答から作成)

防犯体制		設置箇所	設置比率
ソフト対策	巡視	27ヶ所	60.0%
	施錠	28ヶ所	62.2%
ハード対策	警報装置	26ヶ所	57.8%
	照明	21ヶ所	46.7%
	機械警備	22ヶ所	48.9%
	防犯カメラ	26ヶ所	57.8%
その他		2ヶ所	4.4%

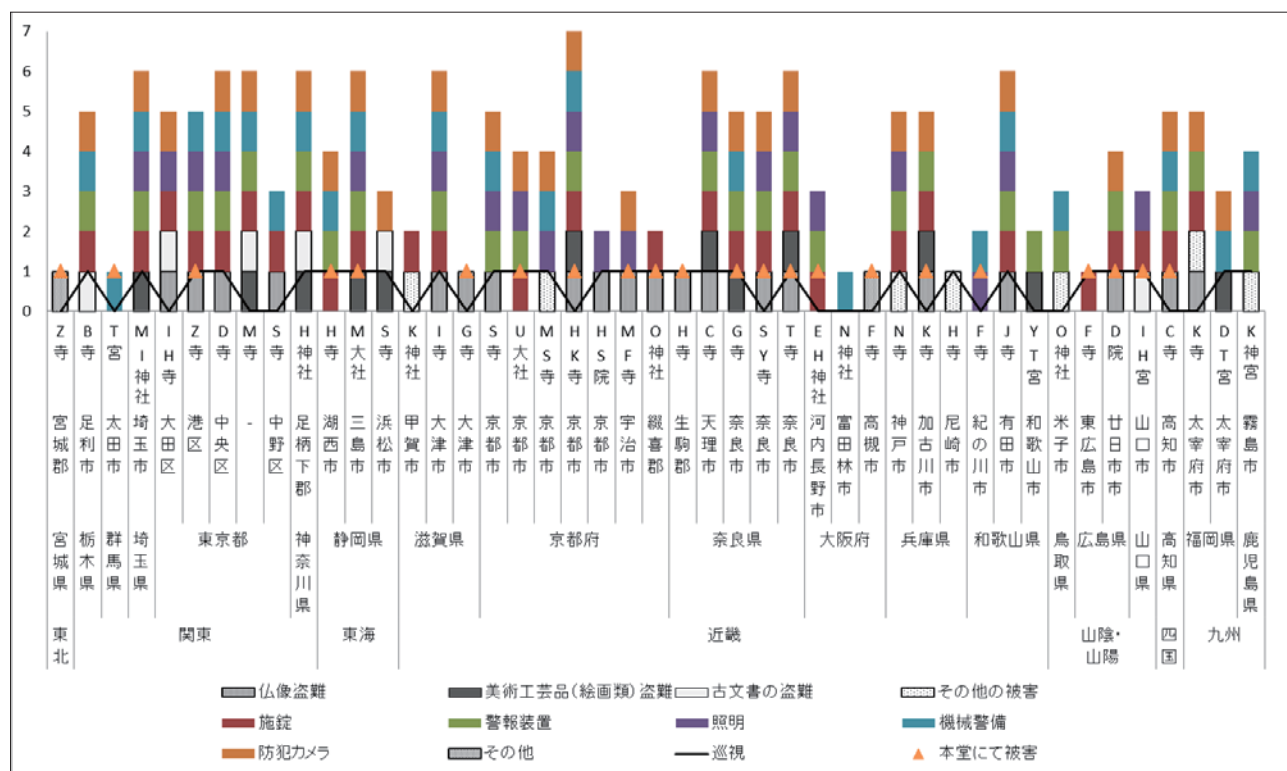


図3 文化財所有者が回答した盗難被害の対象・場所および防犯対策の実態
(2012年度実施のアンケート回答から作成)

(3) 防犯対策

表1と図3のカラー棒グラフと線グラフは盗難被害に遭ったことがある寺社における防犯対策の現状を示したものである。

表1によると、盗難被害に逢ったことがある文化財所有者の60.0%がソフト対策としての巡視を実施しており、過半数以上がハード対策としての防犯設備（施錠、警報装置、照明、機械警備、防犯カメラ）を取り入

れている。後者で最も多いのは施錠（28ヶ所）であるが、45ヶ所のうち62.2%にしか取り入れられていない。これは参拝客などのための寺社の常時開放という配慮だと考えられるが、文化財防犯を強化することの難点を示す結果とも言える。他の防犯対策としては、照明、機械警備（48.9%）、警報装置と防犯カメラ（それぞれ57.8%）の順で設置度が高い。

図3のカラーの棒グラフはハード対策を、線グラフはソフト対策を示す。ハード対策では、盗難被害に遭遇したことがある45ヶ所の寺社のうち6ヶ所（13.3%）で5つのハード対策を整えているが、13ヶ所（28.9%）で4つのハード対策を、7ヶ所（15.6%）では3つのハード対策を、6ヶ所（13.3%）では2つのハード対策を実施していることがわかる。また、対策が全くない1ヶ所（滋賀県G寺）を除いては何らかの対策は施しているようであるが、巡視以外のハード対策は取っていないところが2ヶ所（奈良県H寺、兵庫県H寺）で、機械警備のみに頼っているところも2ヶ所（群馬県T宮、大阪府N神社）で、照明と巡視のみを実施しているところは1ヶ所（京都府HS院）であることがわかる。なお、被害対象（仏像・絵画類・古文書など）が2種類以上の寺社では3つ以上のハード対策を施している傾向を示すが、滋賀県のK神社のように施錠以外の防犯対策は全く行われていない箇所もある。

(4) 文化財所有者からの要望

盗難被害に逢った経験がある45ヶ所のうち6ヶ所の所有者から防犯システムの設置や新しい情報を希望しており、1ヶ所では夜間警備や管理難の解決を求めている。また、4ヶ所の所有者が補助金の支援を希望していた。

3. ヒアリング及び実地調査からみる文化財の盗難被害と防御システム及び管理の実態

表2はヒアリング調査と実地調査ができた調査対象9ヶ所の指定文化財の件数（人為的災害の影響を直接受ける建造物と美術工芸品のみ取り上げた）と調査で把握できた被害内容、被害前と被害後の防御システムの状況、文化財所有者・管理者などにおける課題について分析と考察を行った。

(1) 被害箇所の文化財保有状況

調査対象9ヶ所とも国・都道府県・市町村が指定した文化財をそれぞれ保有している。長崎県T市の3か所の寺社は建造物指定はなく、美術工芸品のみが文化財指定を受けているが、他の箇所は建造物と美術工芸品の両方とも文化財に指定されているものが多い。

(2) 被害に逢った箇所の境内管理の脆弱性

2章1節で防犯設備があるにも関わらず盗難被害に逢った箇所は全盗難被害箇所の24.4%であり、2章2節では盗難被害対象の種類が多い箇所は防犯対策の項目数も多いことが判明した。そのため、本節では被害箇所の立地条件や塀・柵などの設置状況などから境内管理の脆弱性について考察する。

表2によると、6ヶ所（67.7%）の寺社周辺に塀や柵がないことがわかる。愛知県R寺と兵庫県K寺は境内周辺に特に塀や柵を設けず、一部は植栽で境内の領域を示していることを特徴として挙げることができる。また、滋賀県のI寺、奈良県のC寺、長崎県のK神社・T神社は山の麓や裾に位置しているという地理的条件により、塀や垣の設置が殆ど見当たらない寺社である。一方、奈良県のG寺・K寺は塀はあるが、盗難に遭った事例である。なお、長崎県のK寺・K神社・T神社は3ヶ所とも無住寺社という共通点がある。

(3) 人為的災害による文化財の被害内容

調査の結果、近年の文化財における人為的災害としては盗難・放火・落書きの3種類があることが判明した。

① 盗難

まず、盗難の被害時刻は、美術工芸品の盗難に関しては3ヶ所の所有者（奈良県G寺・K寺・C寺）が「開門時刻から拝観開始時刻の間である」と回答しているが、2ヶ所の所有者（愛知県R寺、奈良県G寺）が「拝観時間中である」と回答している。また、兵庫県K寺や滋賀県I寺では「大雨の嵐の夜」や「梅雨の豪雨の後の夕刻」のように悪気象条件や暗い時間帯に被害に遭ったことがわかる。一方、賽銭が取られたのは2ヶ所

表2 人為的災害による文化財の被害箇所の指定文化財保有状況と被害内容・防御システムの実態

所在地			調査 年 月 日	指定文化財						境内管理上の特徴	人為的災害による被害内容								防御システムの状況	
都 道 府 県	市 町 村	調査 対 象		建造物			美術工芸品				盗難				放火		落書き		被害前	被害後
				国 指 定	県 指 定	市 指 定	国 指 定	県 指 定	市 指 定		被害時刻	境内への アクセス	被害場所	被害内容	被害場 所	被害 内 容	被害場 所	被害 箇 所		
愛知県	T市	R寺	2013年 7月19日	-	-	1件	-	1件	9件	境内周辺に塙・柵なし	朝 9時30分頃	拝観客と同様	収蔵庫	掛け軸7点(国指定1点、市指定3件、未指定3点)	-	-	-	-	有	改善
兵庫県	K市	K寺	2013年 10月22日	6件	3件	1件	13件	10件	22件	境内周辺に塙・柵なし	未明 開門～拝観前 大雨の嵐の夜	拝観客と同様	仏堂 収蔵庫	仏像及び掛け軸の被害多発 (国指定から未指定まで)	塔、仏堂 境内のベンチ	2件	-	-	有	新しい収蔵庫建設＋セキュリティシステム強化
滋賀県	O市	I寺	2013年 11月 8日	9件	-	-	34件	-	-	山の麓に位置、境内入口を除いては塙・柵なし、建物は多くの樹木に囲まれている	夕刻、梅雨の豪雨の後	不明	仏堂	仏像1点	-	-	多宝塔(国宝)	背面の軸組	無	収蔵庫建設＋セキュリティシステム導入
奈良県	N市	G寺	2013年 11月27日	4件	-	-	4件	-	-	市内に位置、塙に囲まれている	開門～拝観前、 拝観時間中	拝観客と同様	仏堂 収蔵庫 境内	小さい仏具、石造仏など	-	-	-	-	無	有、改善
	N市	K寺	2013年 11月27日	3件	-	2件	5件	-	3件	塙はあるが、管理者側の人的体制が十分ではない	開門～拝観前、 拝観時間中、 深夜～未明(賽銭)	拝観客と同様	仏堂	仏像1点(未指定)、賽銭	-	-	-	-	無	有(△)
	T市	C寺	2013年 11月28日	3件	-	-	2件	1件	-	塙なし、山の裾に位置	開門～拝観前、 不明(賽銭)	山の道を利用	仏堂	仏像及び掛け軸3点(未指定)、小さい仏具、賽銭	仏堂	1件(※盗難も兼ねる)	-	-	無	有、強化
長崎県	T市	K寺	2013年 10月23日	-	-	-	-	1件	-	無住、建物一棟のみで、仏堂の入口に施錠	不明	拝観客と同様	仏堂	仏像1点(県指定)	-	-	-	-	無	検討中
	T市	K神社	2013年 10月24日	-	-	-	1件	1件	11件	無住、塙なし、山の麓に位置	不明	不明	-	仏像1点(国指定)	-	-	-	-	不明	不明
	T市	T神社	2013年 10月24日	-	-	-	2件	1件	-	無住、塙なし、山の麓に位置	不明	不明	-	経典1点(県指定)	-	-	-	-	有(1ヶ所のみ)	不明

(奈良県K寺・C寺)であり、「深夜から未明までの間である」と回答している。犯人の寺社境内へのアクセスは6ヶ所が参拝者及び拝観者と同様に正面の山門や鳥居から境内に入ったと推定されており、3ヶ所は不明で、1ヶ所は山の道を利用したと考えられている。

盗難被害の場所は、仏堂の場合は4ヶ所(滋賀県I寺、奈良県K寺・C寺、長崎県K寺)であるが、収蔵庫の場合は1ヶ所(愛知県R寺)のみである。一方、仏堂と収蔵庫の両方とも被害に遭っていたところは2ヶ所(兵庫県K寺、奈良県G寺)である。兵庫県K寺では被害に遭う度に新しい収蔵庫が建てられ、初代の収蔵庫は木造建物であったが、2代目と現在の3代目は鉄筋コンクリート造の収蔵庫を建て、防御システムも強化された。奈良県G寺の仏堂では普段使う仏具(特に、五銚杵のうち小さいもの)が盗まれやすい傾向があったため、堂内に柵を設置するなり、あるいは使う時だけに仏具を取り出しているそうである。また、G寺の収蔵庫では昔は修学旅行の学生らによる被害はあったようであるが、手が届かないように展示品の段を高くしたり、カメラ・センサーなどを設置したため、最近は特に被害はないそうである。

被害内容をみると、美術工芸品としては仏像(高さ50cm程度の小型)や掛け軸(仏堂や収蔵庫の壁に掛かっていたモノが盗まれる場合が多い)が主に盗難に遭っており、未指定文化財もあるが、指定文化財の被害が多いことがわかる。

盗難文化財は幸い取り戻すことができたモノ(兵庫県K寺の一部盗品、滋賀県I寺、奈良県C寺)もあれば、未だに行方不明のモノもあり、愛知県R寺・奈良県K寺のようにレプリカをつくって拝観客に見せている箇所もある(図4)。また、盗難文化財のうちには取り戻すことはできたが、一部が損傷したもの(滋賀県I寺の盗難仏像は仏頭がなくなったまま保管されている)や無くなった部分を新造したもの(奈良県C寺の愛染明王像の台座と光背は新造したものである)もある。

② 放火

兵庫県K寺は盗難被害に頻繁に遭っているだけでなく、放火による損失もあり、建造物の被害としては2棟が被害に遭っていることがヒアリング調査で判明した。特に、県指定文化財の木造の三重塔は鍵穴から油を染み込ませた新聞紙を導火線代わりに突っ込んで放火したそうである。K寺の住職の証言によると、塔内から燃えてしまったので消火に苦労したようで、一度鎮火したと思い消防車が帰った後に再び燃え上がった事例である。幸いにも心柱は残り、仏像も搬出できたので、1980年に復原し、現在では塔の周りにはフェンスを巡らせ、厳重な警戒をしている(図5)。放火犯は捕まったが、心身耗弱の人で、K寺近くの神社の



図4 愛知県R寺の絹本着色観経曼荼羅のレプリカ（左、2013年7月19日撮影）と奈良県K寺の不動明王像の模刻（右、同年11月27日撮影）



図5 復原された兵庫県K寺の三重塔（2013年10月22日撮影）



図6 滋賀県I寺の多宝塔の背面扉の落書き（2013年11月8日撮影）

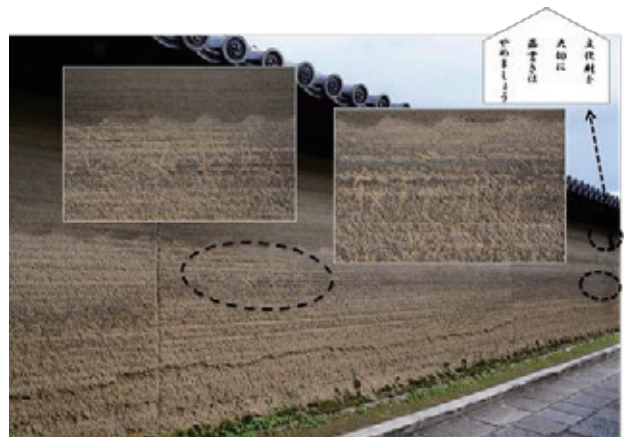


図7 法隆寺の落書き被害（2013年11月28日撮影）

鰐口の紐も放火したそうである。また、同寺では数年前には開門する前に仏堂に侵入し、堂内の全ての蠟燭に火をつけたり、山門近くのプラスチックのベンチに放火する事件もあり、被害の経験度が高い寺である。

奈良県C寺では明治期に愛染明王像を盗んだ犯人がその仏像が安置されていた仏堂も放火したそうである。焼失した仏堂は再建されず、愛染明王像は他の仏堂内に移され安置中である。

③ 落書き

木造建造物や土塀が多い日本では文化財の落書きの被害は甚だしいが、今回の調査で最も被害が目立った事例を取り上げると滋賀県I寺の多宝塔である。I寺の場合は古い落書きが多く（図6）、幸いにも最近のものではなかった。しかし、2013年11月27日付けの『読売新聞』には「法隆寺重文の塀2か所に落書き」という記事が掲載されるなど、指定文化財に対する管理が整えているとはいえないのが現状である（図7）。

(4) 被害前後の防御システムの状況

人為的災害に遭う前の防御システムの設置状況をみると、6ヶ所の寺社で防御システムが全くなかったが、そのうち3ヶ所（奈良県G寺・K寺・C寺）ではカメラやセンサーなどの防御システムを設置していることが判明した。しかし、奈良県C寺のように、被害に遭う度にセンサーやカメラなどを増やしており、文化財の景観を配慮せず防御システムの過剰な設置が目立つ事例もある。C寺は本堂内には防犯カメラを設置するとともに、本堂の回りには柵を設置し、境内の受付の近くには赤外線センサーを設置している。また、本堂と庫裏には自動火災報知器（空気管）はすでに設置されていたが、数年後に奈良県内に寺社の放火が次々と発生したため、炎感知器を本堂の12～13ヶ所に追加したという。また、兵庫県K寺と滋賀県I寺では防御シス

テムだけでなく、収蔵庫をも建設している。

一方、防御システムを備えていたにも関わらず、盗難被害に遭ったところも2ヶ所（愛知県R寺、兵庫県K寺）ある。

前者は、R寺の住職の奥さんが防犯用の警報器の音で異常に気づき、住職や他の人に知らせたが、被害当時は本堂や他の建物にも警報器が付いており、どこを開けても同様の警報音が鳴る仕組みであったため、被害当日は収蔵庫までは確認に行かず被害に気付くのも遅くなった事例である。R寺では被害後には本堂や他の建物の警報器と収蔵庫の警報器を分離したため、災害の経験から既存の防御システムを見直し、改善した事例として注目できる（図8）。



図8 愛知県R寺の防犯警報監視盤
(2013年7月19日撮影)

後者は、2002年の盗難事件の際には収蔵庫に警報装置があったにも関わらず被害に遭った事例である（図9）。被害当時、収蔵庫内部の収蔵スペースであった展示室の各々の入口にはシャッターとセンサーが付いていたが、犯人はそれらが付いていない部屋に入り、展示室に通じる窓を侵入経路として選択していた。被害後に新収蔵庫の建設を進め、防御システムも強化した事例である。

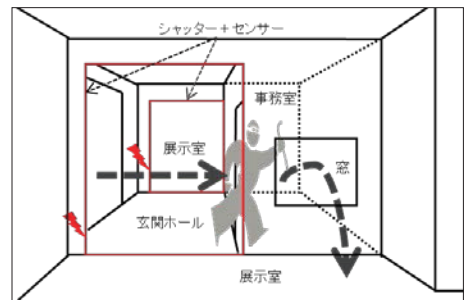


図9 兵庫県R寺の盗難被害現場における侵入経路推定略図（筆者作成）

上記の事例分析を通して、大部分の被害箇所では被害後に防御システムを取り入れるなり、既存のシステムを改善・補強していることがわかる。しかし、防御システムがあるにも関わらず被害に遭っている事例は、防御システムを備えている場合でもその配置計画などに問題はないか再び検討する必要があることを示唆する。

(5) 文化財所有者・管理者などにおける課題

ヒアリング調査で文化財所有者から取り上げられた課題のうち最も顕在化したのは「防犯システム導入にかかる経費」である。特に、設置費用に関する所有者の負担よりもメンテナンス費用について悩む所有者が多かった。次いで、盗難文化財であることを証明するための文化財（未指定文化財も含む）の目録および詳細情報（年代、色彩、寸法、形状など、写真）に関する資料の作成が求められている。さらに、文化財所有者の高齢化や後継者の不在、防犯上の理由から博物館への寄託や収蔵庫保管、レプリカの制作などが進んでいるため、文化財（美術工芸品）が持つ本来の機能や意味に関する価値の低減はもちろん、所有者・管理者の日常的な管理の衰えの傾向があるようである（愛知県R寺の住職の証言では、かつては定期的に虫払いをすることで文化財の安否確認も伴っていたという）。

4. 結論

本稿では文化財所有者への1次調査としてアンケート調査を実施し、そこから得た情報を基に2次調査としてヒアリング調査及び実地調査を行い、文化財の盗難被害の状況と防御システムの実態を明らかにした。2段階の調査結果を分析・考察した内容を下記する。

- (1) 文化財の盗難被害を経験した寺社は他の人為的災害の経験度も高く、3種類以上の災害経験箇所も15.6%にも及ぶ。盗難被害箇所の約半数（48.9%）が本堂にあったモノが盗まれ、絵画や古文書よりは仏像の盗難が多い。被害箇所の約1/4の箇所に防犯設備を設置していないと回答したが、防犯対策としては被害箇所の約60%が巡視を行っているほか、過半数以上がハード対策としての何等かの防犯設備（施錠、警報装置、照明、機械警備、防犯カメラ）を導入していることが判明した。また、15.6%の被害箇所で防犯システムの設置や新しい情報、夜間警備を希望しているほか、8.9%の被害箇所では補助金の体制改善を求めていることがわかった。
- (2) 実地調査では、67.7%の寺社が境内の周辺に塀や柵を設けていないことが判明した。そのうちには境内の領域を示すために植栽している箇所もあれば、山の麓や裾に位置している立地条件の影響で塀や柵を設けていない箇所もある。また、アンケート調査では盗難被害の62.2%にしか施錠をしていない。これらは礼拝空間としての寺社本来の機能が文化財防御においては脆弱であるという一面を示している。

しかし、ヒアリング調査によると、犯行時刻は夜中より拝観開始時間の前後や開門時間中が多く、文化財への侵入口としては塀を超えることはなく、受付や正面の入口を利用することが多い（立地条件によっては山の道を利用した場合もある）。そのため、塀や柵などは実質的に文化財防御に効果があるとは言いがたいが、抑止効果はあると言える。

- (3) 実地調査によると、盗難被害は参拝客が出入りする仏堂はもちろん、防御システムがあった収蔵庫でも発生していることがわかる。その理由としては、従来に設置された防御システムの問題点を見抜いた犯行が行われており、境内における警報システムの有無に関わらず、ソフト・ハード対策の両方における日常における管理状況を見直す必要があることを示す。
- (4) ヒアリング調査によると、古文書よりは仏像や絵画が盗まれやすく、また高さ50 cm程度の小型の仏像や石造仏、掛け軸（カメラなどが設置されている宝物館に展示されているモノよりは、お堂や収蔵庫の壁などに掛けられているモノ）などが狙われやすいことが明らかとなった。
- (5) かつて盗難や放火に遭った箇所では文化財の防御システムも強化しているようである。しかし、防御システムの導入や改善も重要ではあるが、適切な数量と場所を考慮した配置計画ではない限り、過去と同様の被害を繰り返すこととなることが判明した。特に、防御システムのみに頼らず、近所の被害ニュースを日頃から察知しておく努力を積み重ねてゆくことが最も重要であろう。また、防御システムの設置及びメンテナンスの費用への対策と文化財（未指定を含む）の情報が記載された目録作成なども急務であると言える。

謝辞：ヒアリング調査及び実地調査にご協力頂いた文化財（寺社）所有者の皆様及び対馬教育委員会の担当者の方々に深甚の意を表します。また、本研究は立命館大学歴史都市防災研究所の拠点支援プログラムと住友電気工業(株)による受託研究「文化遺産を対象とした人為災害状況と防御システムに関する調査研究（代表：谷口仁士）」の支援によるものである。

参考文献

- 1) 文化庁：国宝・重要文化財（美術工芸品）の防災、防火及び防犯対策の徹底等について（http://www.bunka.go.jp/bunkazai/bouka_bouhan/h250819_bousaibouka.html），2014.4.9 参照。
- 2) 文化庁：美術工芸品の防火・防犯対策チェックリスト（http://www.bunka.go.jp/bunkazai/bouhan/pdf/bijutsukougei_checklist.pdf），2014.4.9 参照。
- 3) 朴ジョンヨン・崔青林・金玟淑・谷口仁士：文化財所有者を対象とした人災・獣害の現状と防御システムに関する調査研究，歴史都市防災論文集，Vol. 7，立命館大学歴史都市防災研究所，pp.161-168，2013.7.
- 4) 菅野朋子：韓国窃盗ビジネスを追え-狙われる日本の「国宝」，新潮社，2012.